

平成 22 年 6 月 7 日現在

研究種目： 基盤研究（C）
 研究期間： 2007～2009
 課題番号： 19520046

研究課題名（和文） 中国初期禅宗史と大乘戒運動
 研究課題名（英文） The Zen Buddhism of the Chinese early days and exercise of Shira
 of the Mahayana Buddhism

研究代表者

中島 志郎（NAKAJIMA SHIRO）
 花園大学・文学部・教授
 研究者番号： 40268123

研究成果の概要（和文）：

初期禅宗の成立過程において、大乘戒の持つ思想的な重要性について構想をまとめるに至った。具体的な文献の注釈的研究として荷沢神会の『南宗定是非論』訓読注釈本の最終原稿をまとめることができた。成稿はほぼ完成したがデータベース化(入力)はまだ完全ではない状態に留まった。禅宗における大乘戒の意義を解明する一つの基本作業として、順次、発表予定である。また中国泉州一帯の仏教寺院を実地調査することができた。文献の文言が現地調査と連結する点が多々あり、早急に分析の成果をまとめたい。

研究成果の概要（英文）：

In the process when early Zen Buddhism was formed, I was able to compile the prospects about the importance that Mahayana-Sila(大乘戒) had on thought.

For a study of the explanatory note of concrete documents, I was able to gather up the Japanese reading of the "Nansyuu-Teizehi-Ron(南宗定是非論)" of Shen-Hui (神会) society and the last completion manuscript of the explanatory note work.

The manuscript was almost completed, but the input was confined to the state that did not yet conclude for the database. As basic work of one elucidating significance of Mahayana-Sila(大乘戒) in the Zen Buddhism, I am going to announce it sequentially

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	700,000	210,000	910,000
2008年度	600,000	180,000	780,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
総計	1,900,000	570,000	2,470,000

研究分野：人文学
 科研費の分科・細目：哲学・中国哲学
 キーワード：大乘戒、初期禅宗

1. 研究開始当初の背景

中国仏教は伝播以来約七百年を経た唐代の中期、盛唐に至って大きな転換点を迎える。禅宗という従来の中国仏教とは著しく異なる形態をもった新仏教の成立という事態がそれである。禅宗の成立に至る歴史的背景、教理的背景はこの分野の最重要課題として膨大な先学の蓄積がある。分けても中国初期禅宗の形成期はその先端的な分野であり、禅宗誕生の理由を奈辺に見いだすかは、いくつもの仮説が検証されてきた。それは今日の禅宗が宗旨とするところを検証する意味で、伝統仏教を教学仏教と規定し、禅宗はそれに対抗する実践的仏教、坐禅といった禅定の実践を専らとする新たな仏教の運動を基盤にして誕生したという問題構成で理解されてきた。しかし、盛唐の時代は中国史、中国文明の歴史の上でも大きな転換期であることは従来より認識されてきたのだが、同時に中国仏教の転換期でもあることは有機的に関連づけて理解されてきたとはいえない経過がある。禅宗はまさにこの転換期の産物であるが、禅宗の誕生が、先に見た如く教学即ち理論的仏教に対する禅宗即ち実践的仏教という図式で理解されてきたために、歴史上の転換期の意味がそこに十分に反映されたとはいいがたいのであった。本研究はこの点に問題の所在を設定し、禅宗の形成にこの時代に俄に勃興する大乘戒、菩薩戒の特異な顕彰運動が密接に関連しているのではないかと、という仮説を提起し検証しようとした。特に初期禅宗の重要人物の一人である荷沢神会(684-758)に着目し、彼に関わる文献資料を解説する作業を通じて、先の課題に文献実証的に迫ろうとした。荷沢神会については、本人はかつてすでに『神会の語録』(禅文化研究所2007刊行)としてまとめられた『南陽和上頓教解脱禅門直了性壇語』を中心に、語録の全般的な理解と思想の展望を成果の一端として得ている。その研究を継続する形で今般、新たな問題として浮上してきたのが、先に仮説として掲げた初期の禅宗運動に見られる大乘菩薩戒の特異な解釈態度であり、それは初期禅宗に共通する思想の課題であることが分かってきた。すでに神会の師である曹溪慧能の「敦煌本六祖壇経」においても独自の大乘菩薩戒思想(心地無相戒と自性清浄三学)が表明されていたのだが、それは種々の変奏をとまなないながら同時代の形成期禅宗の周辺に共通の主張なのではないかと推測されるに至った。

この間にも千田たくま(「戒概念の変化から考察した初期禅宗の頓悟思想『禅学研究』

85、2007)、伊吹敦(「戒律から清規へ」『日本仏教学会年報』74、2008)等の論文が発表されたが、いずれも本研究の主題と通底する所見が多々見受けられ、本研究の方向性について妥当性を認識できた。あらためて『南宗定是非論』の内容の重要性と、神会とその周辺の文献研究の一層の必要性を痛感したのがその背景である。

2. 研究の目的

1、より八世紀の中国仏教における大乘戒、菩薩戒の思想的な影響は、同時代の初期禅宗の動向にとどまらず、ひいては新羅の元暁の一乗戒思想、日本の最澄の大乘戒壇独立にまで関連する、この時代の東アジア仏教全域にまたがる共通の思想的運動であった可能性が推察されるに至った。

そのなかで影響の深刻さの点でも、運動の規模の大きさからも中国禅宗の成立は際だった特徴を持つ。それは中国中世の後期に位置する時代的背景の下に、それに対応する形で中国中世仏教に劇的な形態の変化をもたらしたからである。禅宗が単に実践的仏教の発展形態ではない理由はまさにここにあり、教学仏教を旧時代の仏教、中国中世前期の仏教として中世仏教を克服する運動として、禅宗という仏教の新形態は誕生すると理解できるのである。その禅宗は特に誕生当初に大乘戒運動の決定的な思想的影響を承けていた、あるいはその中心的な運動の主体に他ならなかったと考えられるのだが、その痕跡は後世の禅宗の内には見いだすことが極めて困難になっている。そこには大乘戒、菩薩戒思想が短期間の運動であった相応の理由もあるのだが、中国中世仏教はまったく新たな中国仏教である禅宗の形成にその運動の結論をひとつ見いだすのである。このような展望の下に、当面は荷沢神会の菩薩戒に対する解釈の特異性を解明することに専念した。それを通して初期の禅宗の大乘戒思想の特徴を解明することができると考えたからである。本研究は神会の大乗戒や三学(戒、定、慧)理解を『定是非論』という文献の注釈作業を通して解明することに努めた。従来の認識では大乘戒と三学はまったく、関係が希薄なものとして理解されてきたが、初期禅宗の内では大乘菩薩戒を根拠にして、新しい三学の理解が形成されていたのであり、大乘戒の授受と禅定の実践という禅戒の特異な結合形態の実現が、初期禅宗の主張となり、禅宗の特徴を根拠づけていると推測できたのである。禅戒一如の形態が初期禅宗に見いだせるのは大乘戒即ち仏性戒を禅定を通して撤

見するという、有機的な結合こそ「見性成仏」の原初の形態である可能性が見えてきた。そのために先ず文献の注釈作業を終えることが最終目的に至る前提的作業となると考えた。

3. 研究の方法

荷沢神会の語録である『南宗定是非論』は、初期禅宗の敦煌文献として周知の一書であるが、神会の思想解明の基本文献でもある。そのなかに大乘戒、三学に対する特徴的な理解や同時代の対抗勢力である北宗禅に対する批判と論争を記録しており、この文献の注釈的解読を通して、問題の所在を厳密に設定できるだろうと考えた。研究作業の手順もすでに刊行された『神会の語録』(前掲書)以来、一貫して共同の協力者による研究会方式で、原案を作成し、共同の討議を経る中で内容を確定した。具体的な作業手順としては『神会の語録』の形式を踏襲して、本文の校訂、段落分け、訓読読み下し、語義注釈の作成という工程で研究した。

また大乘戒、菩薩戒運動の広範囲な浸透状況と思想的な影響を仏教の教理的視点から分析する必要があり、別途論文として準備中である(未完成)。

4. 研究成果

神会の『南宗定是非論』について、本文校訂、訓読、語義注釈、現代日本語訳、という体裁で全文を解読することができた。すでに同書は現代語訳として田中良昭訳注「菩提達摩南宗定是非論」(『大乘仏典中国・日本編11・敦煌II』中央公論社、一九八九年)が存在するが、本研究の目的から見るとまだ不十分であることが痛感された。そこで敢えて新たな訳注本の完成に着手したのだが、全面的な再検討を企図して、訓読と注釈の最終原稿をまとめることができた。禅宗における大乘戒の意義を解明する一つの基本作業として、新たな成果が得られたと考えているが、成稿のデータベース化はまだ完全ではない状態に留まっている。

以下は『南宗定是非論』入力原稿の冒頭部分である。

《訓注 菩提達摩南宗定是非論》

凡例

一、本書は荷沢神会『菩提達摩南宗定是非論』(以下『定是非論』)の解題・校録・校記・訓読・翻訳・注釈である。

一、『定是非論』原文の底本は、敦煌博物館蔵〇七七号(首部より約一千二百余字を欠く、即ち本段(一)～(四)末尾までを欠く)を用い、校本には次の四本の敦煌写本を用いる。

A 本 ペリオ三〇四七号 首存尾缺、首部より約一千六百余字(即ち〔五〕段の途中)

を存し、底本の欠を補うのに本写本を以てす。

B 本 ペリオ二〇四五号 首缺尾存 本段(五)末より存す。

C 本 ペリオ三四八八号 首尾缺、(十一)より(二八)途中の二千六百余字が存す。

D 本 スタイン七九〇七号 首尾欠、一行二二～二四字詰、全十五行の一葉を存し、上部約三分の二が残缺しており、〔一〕〔二〕部分に当る。

A 本=敦博本〇七七(首闕:六途中～最後)

B 本=P三〇四七(有首部:一～七)

C 本=P二〇四五(首闕:)

D 本=P三四八八(首闕)⇒C

E 本=S七九〇七(殘片)

(楊曾文《神會和尚禪話録》中華書局)

一、

この間の神会語録研究の歴史的な経過を簡単に回顧しておく、まず台湾の胡適は一九二六年、九月四日、ペリオ三四八八を、同月十八日、ペリオ三〇四七をバリ国立図書館において発見した。

一九三〇年 胡適はペリオ三〇四七の神会『雜微義』に相当する部分を「神會語録第一殘卷」に、『定是非論』部分を「神會語録第二殘卷」とし、ペリオ三四八八を「神會語録第三殘卷」として翻刻校訂し、『胡適神會和尚遺集』(中華民國十九年四月)を刊行した。

一九五八年 胡適「新校定的敦煌写本神會和尚遺著兩種」を発表した。

一九七四・七六年 胡適の新校訂本を用いた訳注本が篠原寿雄「荷澤神會のことば第二一訳注『菩提達摩南宗定是非論』(駒澤大学『文化』創刊号<1974>第二号<1976>)として発表された。

一九八三年 石峻等編『中国仏教思想資料選編』第二卷・第四冊(中華書局)に『胡適神會和尚遺集』第二殘卷・第三殘卷を用いた『定是非論』を収録する。

一九八九年 胡適の新校訂本及び未公開であった敦煌博物館本を一部使用した田中良昭訳注本『大乘仏典 中国日本編11 敦煌II』(中央公論社)が刊行された。

一九九〇年 劉堅・蔣紹愚主編『近代漢語語法 資料彙編』唐五代卷(商務印書館)に宋紹年校録本が収録される。

一九九三年 かねて向達「西征小記」(『唐代長安と西域文明』所収)によって、存在が知られながら所在の不明であった四本の禪録(「定是非論」「直了性壇語」「六祖壇經」「淨覺注般若心經」)が、一九八六年に敦煌県博物館に「敦博〇七七号」の番号中に収蔵されているのが確認された。その後、それらは『中国仏教叢書・禅宗編』(江蘇古籍出版社)として影印本が刊行された。

一九九六年 敦博本「敦博〇七七号」を用

いた校訂本が楊曾文『神會和尚禪話録』（中華書局）として刊行された。

一、現在『定是非論』の校録本には次の五本があり、おのおの参校本とした。

胡適本…上下の二巻に分け、上巻はA本を底本とし、下巻はB本を底本、C本を校本とした校録本。胡適『神會和尚遺集』巻二「会語録第二残巻 - 定是非論」、巻三「第三残巻」（上海・亞東図書館、一九三〇）、胡適「新校定的敦煌写本神會和尚遺著兩種」（『中央研究院歴史語言研究所集刊』第二九本、一九五八年）に発表され、その後、胡適校敦煌唐写本『神會和尚遺集』（胡適記念館、一九六八年）に再録され、更に『大藏經補編』25（台湾 華宇出版社、一九八六年）、『禪宗全書』36（台湾 文殊文化有限公司、一九八八年）に収録される。

篠原本…胡適本を底本とし、A本・B本・C本を校勘の資として使用したもの。独孤沛序と本文を五十一段に分け、論讚・後序・讚詩は除かれている。篠原壽雄「荷沢神会のことば第二 - 訳註『菩提達摩南宗定是非論』 -」（駒沢大学『文化』創刊号・第二号、一九七四・七六年）。

宋校本…A本・B本を底本とし、胡適本を参校したもの。宋紹年校録「菩提達摩南宗定是非論一卷并序」（劉堅・蔣紹愚主編『近代漢語語法資料彙編・唐五代卷』所収、商務印書館、一九九〇年）。

楊本…首部は胡適本上巻を底本とし、原巻A本にて重校し、以下は敦博本〇七七号を底本、B本・C本及び胡適本下巻を参校したもの。楊曾文編校『神會和尚禪話録』（中国仏教典籍選刊、中華書局、一九九六年七月）所収。

榮校本…敦博〇七七号を底本、A本・B本・C本・D本を校本とし、胡適本・篠原本・宋校本を参校として、詳細な校記を附す。鄧文寛・榮新江『敦煌本禪籍録校』（敦煌文献分類録校叢刊、江蘇古籍出版社、一九九八年）所収。

一、『定是非論』の訳注には次の二本があり、適宜参照した。

① 篠原本…前掲の校録本による訳注本。篠原壽雄「荷沢神会のことば第二 - 訳註『菩提達摩南宗定是非論』 - 」

② 田中本…胡適本を底本とした訳注（篠原本の分段を踏襲して五十五段に分かつ）であるが、A本・B本・C本を参校する以外に、特に不明箇所が多い第一〇段尾部より第二十一段首部（本書では〔七〕尾部より〔一九〕首部に当る）は敦博本〇七七号が用いられている。田中良昭訳注「菩提達摩南宗定是非論」（『大乘仏典中国・日本編 11・敦煌Ⅱ』所収、中央公論社、一九八九年）にまとめられた。

一、本稿では『菩提達摩南宗定是非論』の原文を三十八段に分け、それぞれに見出し語

を付した。

一、底本の文字を改めたり補ったりした場合には、必ずその理由を校記に記した。

一、異体字・俗字・古今字等の文字の表記は、通行の繁体字（原則としてユニコード包括基準による）で統一した。

一、翻訳・注釈（但し見出しの句は繁体字）は通行の常用漢字で統一した。

一、注釈において引証した禪宗関係の主な文献は下記の通りである（本報告書では文献名は省略した。引用にあたっては句読や訓読を改めた場合がある）。『祖堂集』『景德伝灯録』など周知の禪宗史文献については巻数を示すだけにとどめた。

<以下、省略>

以上のような体裁で『定是非論』全段を三十八節に分け、原文、訓読、注釈を施した。

またその他の活動として、二〇一〇年春には中国福建省泉州一帯の仏教寺院を実地調査することができた。泉州地域は唐代に多くの禅僧が輩出したことで知られる中国禅宗の一大拠点である。今回訪れた泉州開元寺、清玄寺、招慶寺、崇福寺などは、地理誌や語録にも登場する古刹で、文献の文言が現地調査と連結する点が多々あり、新しい知見を得ることができた。

その他、発表論文としては、日本鎌倉時代の道元禅師の禅定と『正法眼蔵』の思考との関連を分析した「道元の身体と言語」（禅文化研究所紀要 2009）、朝鮮時代の仏教を概観した「朝鮮仏教」『アジア仏教史 10・朝鮮・ベトナム編』（佼成出版社 2010）を担当執筆したが、本研究の課題からは内容的には傍系の論文に留まるといわねばならない

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計0件）

〔学会発表〕（計0件）

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）、

○取得状況（計0件）

〔その他〕該当なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中島 志郎 (NAKAJIMA SHIRO)

花園大学・文学部・教授

研究者番号：40268123

(2) 研究分担者 該当なし

(3) 連携研究者 該当なし